

石器時代には野生トナカイやマンモスを狩猟する生活があり、新石器時代以降、絶滅した陸上動物に代わって海獣類の狩猟が始まったと考えられる。さらに18世紀の帝政ロシア期にはロシア・チュクチ交易市場が開かれ、ロシア人とチュクチとの間の交易が盛んになる。また、アメリカ人も交易に加わり、広域の流通圏が形成された。こうしたなかでトナカイの牧畜も拡大した。最後に20世紀に、生産手段の近代化が進むとともにシベリアからサハリンにかけて「牧畜型」「飼育型」「遊牧型」の3タイプの牧畜形態まで引き出している。じつに壮大な論だが、現地調査をもとにして展開されているだけに説得力がある。ユーラシア大陸東部の広い地域の人類史に一石を投じるものといえよう。

しかもそのうえで、チュクチが伝統的にトナカイの多頭飼育を行ってきたため、社会主義時代を経て、今日まで伝統的な牧畜の形態を維持してきたという。ここには、国家の強い管理下にありながら、したたかに自身の暮らしを維持してきた民族集団の姿が垣間見えて興味深い。

「第8章 日本でのチュルクの紹介」は、著者が勤務する国立民族学博物館において、一般を対象に企画されたチュクチ紹介展示に言及されている。そのうえで、展示が主にチュクチのトナカイ牧畜と伝統生活であったために、本書にある農場経営のなかでのトナカイ牧畜に関する理解につながりにくかったという反省が述べられている。

厳しい自然環境のもとで培われてきた伝統的な暮らしは、極北に住む未知の牧畜民のイメージとよく対応する。そこで、自分たちの暮らしとかけ離れた生活文化ほど好奇の目が向けられる。著者の生態人類学研究の視座が現代社会のなかのチュクチの人々に置かれていながら、展示にそれが十分に生かせなかったとすれば、そこには特定の文化を特殊化してとらえようとする大衆の嗜好があり、それに応じざるをえない企画の上での事情が

あったからかもしれない。

じつは同じようなことは他でも起こっている。聞いた話であるが、国内でロマに関する展示がなされた際、幌馬車で移動したかつてのロマの暮らしを示す道具が並べられた。そのため見学者にはロマの特殊性だけが伝わり、差別され続けている彼らを理解することにつながらないという専門研究者の批判から、その展示は中止されたという。

著者が述べるように、モノだけを展示しては現在の彼らの暮らしや社会経済的事情は見えにくい。特定の間人集団を偏見なくとらえるためには、現実の彼らの暮らしや考え方をできるだけ拾い上げて紹介する努力が欠かせないであろう。

その点で、きわめて広い視野と見識のもとに実施されたフィールドワークをもとにした本書は、未知の土地に暮らすチュクチの姿を描くことに成功している。もちろん現時点で明らかにできていない点が多く残されており、今後の研究が期待される。チュクチの研究は端緒についたばかりというが、ここにきわめて質の高い学術書が出たことをまずは喜びたい。しかも、なにより到底出かけることのない極北の地にまるで居合わせたような読後感に浸り、得した気持ちになれる書である。フィールドワークに基づく外国地域研究の実際に触れられる好著であり、地理学の学生・研究者はもちろん、中高の教員にも広くお勧めしたい。

(加賀美雅弘)

山下清海：『華僑・華人を知るための52章』明石書店、2023年4月刊、328p., 2,000円（税別）

本書は、読者にもお馴染みの明石書店「エリア・スタディーズ」シリーズの一環として刊行された。同シリーズは、個別の国・地域を事例に、多様なトピックがまとめられ、読み物としても面白く、

また地誌の授業等で活用される機会も多い。本書については、まず特筆すべき点が二つ挙げられる。一つは、同書が単著として世に出されたことである。シリーズのほとんどが編著・共編著となっているが（既刊の196のうち179）、1人で52章と15のコラムを構成できる蓄積の厚さにただただ驚愕するばかりである。もう一つは、シリーズの中では僅少な、国名ないし地名を冠していない著作という点である（管見では『テュルクを知るための61章』『ケルトを知るための65章』『クルド人を知るための55章』に次ぐ4冊目、むしろ単著としては初）。華僑・華人に焦点を当てて各地域の特性や地域間のつながりを浮き彫りにするという試みは、これまでの著者の膨大な研究蓄積があってこそ可能になったのは言うまでもない。

章立てをみると、「Ⅰ華僑・華人とチャイナタウン」「Ⅱ歴史」「Ⅲ出身地と方言集団」「Ⅳ経済」「Ⅴ政治」「Ⅵ社会・教育」「Ⅶ食文化と生活」の7部から構成され、Ⅴを除く各部にコラムが配置されている。通常の見出しの場合、各部・章の並び順の紹介が一般的であることを承知の上で、ここでは敢えて著者の経歴に沿って整理してみたい。チャイナタウン研究の第一人者である著者について今さら説明は要さないであろうが、こうした観点から内容を整理してみると本書の意義がより明瞭になるのではと考えるのである。

1951年生まれの著者は、大学2年の1973年に今でいうバックパッカーとしてタイ・マレーシアを旅行する。タイのトレッキングツアーで訪れた山地のある村で、ビルマから移り住んだという華人に出会う（コラム8「タイ北部の山地民族の村でみた華商の原点」）。雲南出身の両親を持つ青年は、「毛沢東の乱」でタイ北部へと逃れた華人の学校で学んだ経験があり、標準中国語（マンダリン）を解していた。この経験には、既に、中国の地域的差異や政情と移住した華人との関係が表れていた。

次いで、横浜中華街に焦点を当てた修士課程の調査では、「大陸派」「台湾派」の政治的対立をまざまざと見せつけられる（詳細は山下清海『横浜中華街—世界に誇るチャイナタウンの地理・歴史—』筑摩書房、2021年を参照）。国共内戦と中華人民共和国の成立は、新たな移住者を生み出すとともに、反共主義のターゲットとされるなど、華人が「二つの中国」をめぐる政治に翻弄される状況を生み出した（16章「植民地の独立と中華人民共和国の成立」、37章「莫談国事」から政治参加へ）。

政治的側面との関係では、移住先の国家との関係も華人に多大な影響をもたらした。著者が1978年から2年間留学したシンガポール・南洋大学は、華人文化の維持を目的に中国語での授業を行っていたが、英文教育の優先と共産主義への警戒から締め付けを受け、留学中の1980年にシンガポール大学へと合併されてしまう（43章「南洋大学の設立と「閉校」」）。当時のシンガポール首相であったリー・クアンユー自身が客家（華人の方言集団の一つ）でありながら（23章「客家」）、強い言論統制を行ったことは華人社会に様々な影響をもたらした。さらにインドネシアでは、1965年の共産主義者への弾圧の中で多くの華人が虐殺され、スハルト政権下でも中国語の使用禁止といった抑圧策が採られたほか、マレーシアではマレー人を優先するブミプトラ政策が進められた（34章「インドネシアの華人政策の変遷」、35章「マレー人優先政策下のマレーシア華人社会」）。各国の対華人政策や移住時期の違いは、しばしばチャイナタウンの景観や機能の差異となって現れる（6章「チャイナタウン」、7章「チャイナタウンの景観」）。なお、この間の研究成果は、山下清海『東南アジアのチャイナタウン』古今書院、1987年として公刊されたほか、1986年の博士論文の主テーマとなった方言集団について、本書では第Ⅲ部で詳細に説明されている。紙幅もあって詳細に言及できないが、方

言集団ごとの文化の違いも興味深く、また、前出のリー・クアンユーほか、著名人の所属方言集団についての情報は大変参考になった。

そして、改革開放政策に伴う中国本土の変容と移住の活発化という背景の下、1994～95年のカリフォルニア大学バークレーでの在外研究を経て、著者の関心は北米をはじめ世界各地のチャイナタウンの形成・変貌へと拡大していく。本書では、各地域のチャイナタウンや華人の事例が多数取り上げられるが、特に注目すべきはそれが広範な時間的・空間的スケールからまとめられている点であろう。パリのチャイナタウン（コラム2）の特質は、フランスのインドシナ支配と華人の移動（10章「東南アジアへの華人の進出」、第二次世界大戦後の諸戦争、さらにはベトナム戦争後の対華人政策を踏まえないと捉えられない。中国人苦力（クーリー）（19世紀半ば以降、欧米の植民地を中心に導入された肉体労働者）は、アメリカでの大陸横断鉄道等の大事業に欠かせない労働力となったが、蒸気船の登場が可能にした輸送ネットワークの下、彼らの送中は中南米やオーストラリアにも及び（11章「苦力貿易」、華人排斥運動はアメリカにとどまらずオーストラリアでの白豪主義の成立にもつながった（13章「華人排斥」）ことは記憶しておきたい。

改革開放政策以降の移住中国人の増加（「新華僑」）は、日本でも顕著にみられ、著者は池袋や西川口での新たなチャイナタウンの形成とともに、同時期の新華僑の出身地についても調査を実施し、その特性を論じている（17章「中国の改革開放と新華僑」）。日本での事例については、著者の既刊の書籍（山下清海編『改革開放後の中国僑郷—在日老華僑・新華僑の出身地の変容』明石書店、2014年、など）で概要は知っていたが、本書において改めて気付かされたのは、評者がこの事象を日中の二国間の関係に限って見ていたことである。

新華僑はアメリカ・オーストラリアといった移民国はおろか、一帯一路政策も相まって東ヨーロッパやアフリカでも増加し、新たな形態・景観を持ったチャイナタウンを形成している（8章「オールドチャイナタウンとニューチャイナタウン」、31章「新華僑の海外進出」、38章「中国の「一帯一路」の推進と華人」等）。しかも、1990年代以降の中国の経済発展には、それまで培われてきた海外華人の資本の導入も深く関わっており（27章「華人財閥」、28章「華人企業の中国投資」、29章「グローバル化する華人経済」、華人の再移住や帰国と合わせ、華人の生活世界は地域間の複雑なつながりを象徴するものになっている。

以上のように整理してみると、著者がその経歴の節々で、中国や世界の政情の変化を見据えつつ、華人の生活をつぶさに観察してきた経過がよくわかる。この経験こそが、華人という事象の意義を広範な時間的・空間的スケールで論じることを可能にし、本書を他にはない意義深いものになっている。それはまた、地理学の有用性を遺憾なく発揮する試みとしても評価しうる。たとえば1872年のマリア・ルス号事件は、日本史の重要キーワードとなっているが、なぜ中国人苦力がペルー国籍の船舶に多数乗船させられていたかに考えが及ぶ人は少ないだろう。ペルーでは、奴隷貿易の禁止に伴ってプランテーション農業やグアノ（リン酸肥料の素）採取の労働者として苦力が導入され、後にリマに形成されたチャイナタウンから、中国料理をもとにしたチーフア **Chifa** が全国に広まった（47章「中国料理のグローバル化」）。ソパ・ワンタン **Sopa Wantán** など（ソパはスペイン語でスープの意）、中国語が用いられた料理名が定着し、日本のペルー料理店でも味わえるという。料理が伝播しローカライズされながらさらに拡散するという、文化のダイナミズムを理解するのにこの上ない事例であろう。なお、食文化についてはⅦ部「食文

化と生活」にて多様なトピックが扱われている。ここを読むだけでも、日本で身近な中国料理・中華料理の奥深さに気付けるはずである。「ガチ中華」なる言葉を入れ込めるのも、研究対象に対する著者の柔軟性と飽くなき探究心の表れなのであろう。

加えて、本書で用いられた写真資料が、全て著者自身が撮影していることにも感嘆する。著者は、チャイナタウンに限らず、名所・旧跡や著名人など実に多くの写真を撮っている。このことは、自らの関心だけでなく、地域全体の情報をできるだけ蒐集しようとする研究姿勢の賜物であり、ここには地誌的な方法の本質が表れているのではないか。今回、「エリア・スタディーズ」シリーズとしての刊行にあたり、そうして集められた資料が大いに役立っており、個別のエピソードは読んで興味深いだけでなく、個別のトピックの理解に大いに資するものとなっている。一般に、フィー

ルド調査での関心はどうしても研究対象にのみ偏りがちであるが、著者のこうした研究姿勢からも学ぶべき点は多い。改革開放前の中国訪問（17章「中国の改革開放と新華僑」）の資料は、将来貴重なものとして評価されるに違いない。

総じて、本書が様々な意味で今までに類書のない著作であることが伝えられたと思う。中国経済の発展と華人・華僑の増加は、地域間のネットワークを通じ、本国のみならず移住先の国にもこれまで以上の変化をもたらしている。世界情勢に不透明感が増す中であって、華人を理解することは今後の世界の有りようを考える上でも重要であると、本書に教示してもらえた。本書刊行時点で著者は72歳であるが、その挑戦はまだまだ終わりを迎えそうにない。華人のいるところ山下老師あり、山下老師いるところ華人あり。本書を「集大成」と呼ぶにはまだ早いだろう。

(福本 拓)